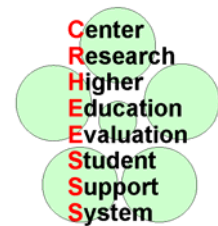


週間センターニュース No.4



第4号(2004年4月5日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

共同学習会のご案内

共同学習会は、教職員の間で教育、研究、そしてその支援のあり方等について自由に議論する場です。どなたでも参加できます(可能な限り事前にご連絡ください)。

第12回 日時: 4月8日(木) 5時限目(16:10~17:40)

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階 A11 演習室

発表者: 堀井祐介(大学教育開発・支援センター)

題目: パワーポイントの初歩

第13回 日時: 4月15日(木) 5時限目(16:10~17:40)

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階 大会議室

発表者: 西山宣昭(大学教育開発・支援センター)

題目: レイト・スペシャリゼーション - 九州大学の場合 -

第14回 日時: 4月22日(木) 5時限目(16:10~17:40)

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階 大会議室

講師: 青野 透 大学教育開発・支援センター教授

題目: 「ミニツツペーパーの活用法」

企画の趣旨: 授業が始まり、各教員の授業改善の取組が行われていると思われる。受講生との応答関係の確立、毎回の授業ごとでの授業評価そして授業改善、という二つの目的をもった、ミニツツペーパーの使用を紹介する。なお、この報告は、本年3月1日に開催された第一回金沢大学教育セミナーでの報告とその内容が重なるが、同セミナーにご参加いただけなかった方、さらには新任教員で授業法改善に模索されている方などを主たる参加者と考えている。

第13回以降は、会場は総合教育棟南棟2階の大会議室となります。

第11回共同学習会の報告

「国立大学法人 金沢大学」が再発足した4月1日(木)の5時限目、総合教育棟南棟2階 A11 演習室において、当センターの早田を報告者として、第11回共同学習会が開催されました。

すでにお知らせしておりますように、共同学習会は、4月以降、毎週木曜日5時限目に継続して開催することになっています。ぜひ、ご参加ください。

さて第11回共同学習会についてですが、以下のような題目で開かれました。

大学評価<番外編>

〔第1テーマ〕FDが、研究の活性化のため?

〔第2テーマ〕裁判所が、大学評価?

〔第3テーマ〕大学評価が、WTO(世界貿易機関)に関係?

〔第4テーマ〕金沢大学は、今後20年で何回大学評価を受ける? 10回くらい?

今回の報告は、その題目に<番外編>とあるように、通常の「大学評価」の常識の中には納まらないかに見えるテーマを取り上げ、その紹介と若干の解説を試みたものです。〔第1テーマ〕では、大学設置基準のFD規定とFD概念に関する学説等との比較対比の中で、FDの第1ステップとして、これを教育改善のための組織的取組みと位置づけその活動にできるだけ多くの人々が参加できる雰囲気作りが重要

であるとの指摘をしました。〔第2テーマ〕では、裁判所がこれまで、司法権の行使を通じて、大学の諸活動に関わる法の適正運用を図ってきたという事実を踏まえ、今後大学評価の領域でも各大学の法令遵守の状況のチェックが行われる中で、高等教育判例の重要性にも留意する必要性を述べました。〔第3テーマ〕では、今日、高等教育は多様な提供形態で国境を越えて流通しつつあり、WTOでもその促進を図る観点から討議がなされていること、学習者の利益を守り競争力の強化を図る観点から、高等教育の質保証システムの構築が、喫緊の課題として急浮上していることを紹介しました。〔第4テーマ〕では、平成16年度より認証評価制度がスタートし国立大学法人評価も6年後に受けなければならないと言う現下の状況下において、金沢大学として20年の間に一体いくつの公的な大学評価を受けることになるのかという問いについて、各評価制度の趣旨・目的の解説も交えて説明しました。最後に、各テーマ共通のキーワードは、「認証評価」、「評価とその結果の通用力」、「高等教育の質保証」であるという説明で報告を締めくくりました。（文責 早田）

レイト・スペシャリゼーション（九州大学の場合）

3月19日、九州大学高等教育総合開発研究センターを訪問し、21世紀プログラム教育開発研究部門の副島雄児教授より、九州大学における学部横断型の新しい教育システム「21世紀プログラム」について詳しく説明していただいた。このプログラムは、昨年度の文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されている。「21世紀プログラム」の学生は、学籍は各学部にあるが、学部からの委託により、21世紀プログラム実施委員会と基幹教官団が責任を持って教育にあたる。チュートリアルやプログラムゼミなど「21世紀プログラム」の独自開設科目が用意されているが、このプログラムの最大の特徴は、各学部が用意している専門科目を、本籍の学部がどこかによらず、また理科系、文科系によらず、4年間にわたり学生自ら選択、履修していく点にある。4年間をかけて、自分の生涯にわたる進路を自ら見出していくことになる。4年次には、学部の研究室を選択し、卒論研究に入る。学生4～5名につき指導教官が一人つき、履修相談、4年間にわたるチュートリアル科目での研究指導、学業、日常生活全般にわたる学生支援にあたる。しかし、それらはあくまで助言であり、学生の自主性を最大限尊重するよう配慮されている。4年間のプログラム終了後は、自ら決めた研究分野への大学院進学が強く推奨されている。このように、入学試験の段階では学部、学科を決めずに入学させ、入学後の自由履修で自ら進路を決めることができるカリキュラムは、東京大学のレイト・スペシャリゼーション(late specialization)として知られている。ただ、学部4年間にわたり、文科系、理科系を問わず自由履修させるシステムは新規のものと思われる。近年いくつかの大学で行われている入学者アンケートでは、明確な目的、興味を持たず、学部を選択したと答える学生が増えている。適切な助言の下に、自分の興味を見出すために履修科目を選択してゆくことほど、勉学意欲を掻き立てることはないように思える。自分自身の目的こそ人を最も積極的にさせる。それでは、このようなカリキュラムを運営する上で、問題点はないのであろうか？

副島教授からは、このプログラムの問題点を中心にインタビューした。2001年に始まった「21世紀プログラム」には、今春初めて4学年が揃う。1学年およそ20名程度の定員である。きめ細やかな個別指導を行うために、定員を増やしていくことは現状では難しいとのことであった。定員は少ないが、このプログラムが九州大学における全学的な教育改革の牽引の役割を果たすことが期待されている。すでに述べたように、どの科目を履修するかは学生に任せられている。特に理科系では、基礎科目の積み上げが重要視されるが、学部のカリキュラムに基づいて履修してきた学生と比較したとき、卒論研究で問題は生じないのだろうか？学部の教官の印象としては、学部生よりも資質が高いという評価がなされているようである。学力とともに、特に実験、演習などの授業では、大多数の学部生に混じっていく“あつかましさ”も求められる。副島教授によれば、ユニークなAO(アドミッション・オフィス)入試により、個性的な学生を選抜しているという。この入試方法も含めて、九州大学の「21世紀プログラム」について、いただいた資料に基づいて、4月15日(木)の共同学習会で紹介する予定である。（文責 西山）

センター教員活動記録 (3月29日～4月4日分)

2004.4.1 第11回大学教育開発・支援センター共同学習会開催

角間ランチョンセミナーも4月8日(木)から始まります。乞うご期待。